

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：奨励研究

研究期間：2022～2022

課題番号：22H04016

研究課題名 てんかんの戦略的な病名開示の検討は就職率を向上させるか？

研究代表者

小川 舞美 (Ogawa, Maimi)

東北大学・医学系研究科・助教

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 480,000円

研究成果の概要：てんかん患者のQOLには、発作だけでなく精神症状や社会参加などが大きな影響を与えるため、心理社会的支援の確立が必要である。本研究では、まずてんかんセルフスティグマ尺度 (Epilepsy Stigma Scale; ESS) の邦訳版の作成を行った。338名のてんかん患者を対象として分析を行い、2因子10項目の「日本語版てんかんセルフスティグマ尺度」を完成させた。この尺度の内的一貫性と構成概念妥当性も確認された。次に「病名開示検討ガイド」に基づいた心理的介入が、患者のセルフスティグマの軽減だけでなく、主体的な治療態度の向上と、計画性のある就職活動の開始につながる可能性があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、てんかん患者の心理社会評価の効果測定に使用可能な信頼性と妥当性を有した邦訳版の尺度を作成したことにある。さらに、てんかん患者を対象に「病名開示検討ガイド」に基づいた心理社会的な介入を実施した本邦で初めての調査であり、てんかん診療における心理社会的支援の基盤となるデータを得ることができたと考えている。今後も対象者を増やしながら長期的なフォローを実施することができれば、他の慢性疾患にも応用可能な支援体制の確立に寄与する可能性を有している。

研究分野：社会学，心理学およびその関連分野

キーワード：てんかん 心理教育 セルフスティグマ 病名開示 就労支援

1. 研究の目的

てんかん患者は、発作だけでなく精神症状や社会参加などの悩みが多く心理社会的支援の確立が急務である。てんかんの罹病期間や抗てんかん薬数など QOL を阻害する要因はすでに多くの研究で明らかにされていたが、介入可能な QOL の促進要因は特定されていなかった。これについて、申請者らがてんかん患者の QOL の促進要因として、ソーシャルサポートと障害受容であることを見いだした。今回の申請は、この研究の発展型として立案されたものであり、患者自身が自分の発作症状を理解し、誤解なく説明できるように支援することで、疾患認知の変化や適切なソーシャルサポートの獲得を促進し、QOL の向上に寄与するのではないかという仮説の検証を目的とした。なお、本研究は、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を受けて実施した。

2. 研究成果

(1) 「日本語版セルフスティグマ尺度」の作成

【対象者】対象は包括的入院精査によって、てんかんと診断された 18 歳以上の患者 338 名（男性 166 名）である。

【方法】「日本語版セルフスティグマ尺度」は、英語版の原著者から許可を得て、バックトランスレーション法を用いて作成した。信頼性の検討には、内的整合性を示す Cronbach の α 係数を算出した。構成概念妥当性の検討には、NDDI-E（抑うつ）、GAD-7（全般性不安）を使用した。

【結果】因子分析で得られた 2 因子構造は、確認的因子分析においてモデルの適応度が許容範囲内であることが確認された ($\chi^2 = 161.27, df = 34, p < 0.01, comparative fit index = 0.929, root mean square error of approximation = 0.105, standardized root mean squared residual = 0.047, Akaike's information criterion = 203.27, Bayesian information criterion = 283.56$)。この 2 因子は、Theoretical Model of Self-stigma に基づいて、「制定されたスティグマ」と「感じられたスティグマ」と名前をつけた。内的整合性を示す Cronbach の α 係数を算出したところ、「制定されたスティグマ (7 items)」の α 係数は 0.88、「感じられたスティグマ (3 items)」の α 係数は 0.82 であった。構成概念妥当性を検討するために相関係数を算出した結果、NDDI-E と「制定されたスティグマ」には正の相関が見られ ($r = 0.44, p < 0.01$)、「感じられたスティグマ」にも正の相関が見られた ($r = 0.41, p < 0.01$)。同様に GAD-7 との間にも「制定されたスティグマ」に正の相関が見られ ($r = 0.48, p < 0.01$)、「感じられたスティグマ」にも正の相関が見られた ($r = 0.38, p < 0.01$)。

【考察】因子分析の結果、「日本語版セルフスティグマ尺度」は原版とは異なる 2 因子構造であることが示され、そのモデルの当てはまりは許容範囲と判断された。 α 係数からは信頼性が支持され、NDDI-E、GAD-7 との関連から概念構成妥当性が確認された。本研究で作成した「日本語版セルフスティグマ尺度」は、てんかん患者のセルフスティグマを測定する尺度として信頼性と妥当性を備えており、今後日本でも幅広く用いられることが期待される。本課題は、「Development and validation of the Japanese version of the Epilepsy Stigma Scale in adults with epilepsy」という原著論文に筆頭著者としてまとめ、Epilepsy Behavior (査読付き英文誌) に掲載されている。

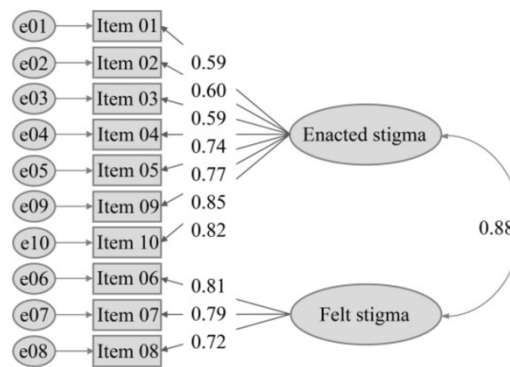


図1.日本語版セルフスティグマ尺度の因子構造

(2) てんかん患者への「病名開示ガイド」を用いた介入の有用性の検証

【対象者】包括的入院精査によって、てんかんと診断された 18 歳以上の患者 2 名である。

【方法】包括的入院精査とその後の外来診察日に、公認心理師がオーストラリアてんかん協会発行の「就職に向けた病名開示のガイド」に基づいて本人と面接を行った。ガイドは「病名開示の必要性」「病名開示の時期」「病名開示の内容」の 3 つのパートからなる。面接時間は各 60 分であった。外来診察日の面接は遠隔システムを用いて実施した。

【結果】本研究で実施した介入は、患者が就職と治療に関する見通しを立てることを促進し、主体的な治療態度の向上と、計画性のある就職活動の開始に役立つ可能性が示唆された。また、本人の同意を得て、ソーシャルワーカーにそれらを共有したことで、継続的に意思決定を促進する体制を整えることができた。本課題の一部は、日本てんかん学会と全国てんかんリハビリテーション研究会で発表された。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ogawa Maimi, Fujikawa Mayu, Tasaki Katsuya, Jin Kazutaka, Kakisaka Yosuke, Nakasato Nobukazu	4. 巻 134
2. 論文標題 Development and validation of the Japanese version of the Epilepsy Stigma Scale in adults with epilepsy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Epilepsy & Behavior	6. 最初と最後の頁 108832 ~ 108832
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.yebeh.2022.108832	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Maimi Ogawa, Mayu Fujikawa, Katsuya Tasaki, Yosuke Kakisaka, Kazutaka Jin, Nobukazu Nakasato
2. 発表標題 Predictors of enacted and felt stigma among patients with temporal lobe epilepsy
3. 学会等名 American Epilepsy Society Annual Meeting（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川舞美、藤川真由、本庄谷奈央、此松和俊、浮城一司、曾我天馬、柿坂庸介、神一敬、中里信和
2. 発表標題 「就職に向けた病名開示のガイド」を用いた心理社会評価が自立を促進した1例
3. 学会等名 第19回全国てんかんリハビリテーション研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川舞美、藤川真由、田崎勝也、柿坂庸介、神一敬、中里信和
2. 発表標題 てんかん患者のセルフスティグマの予測因子
3. 学会等名 第55回日本てんかん学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川舞美, 中里信和
2. 発表標題 クラウドファンディングの真のゴール
3. 学会等名 第55回日本てんかん学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川舞美
2. 発表標題 公認心理師の「こんな仕事もやっています!」
3. 学会等名 第55回日本てんかん学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川舞美
2. 発表標題 てんかんと差別
3. 学会等名 第55回日本てんかん学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
中里 信和	(Nakasato Nobukazu)
神 一敬	(Jin Kazutaka)
柿坂 庸介	(Kakisaka Yosuke)
藤川 真由	(Fujikawa Mayu)